

浜益 歴史

ガイドブック





▲陣屋内に建立された八幡神社(現在は大手門下に移転)

が陣屋である。陣屋の場所の選定はさまざまな案があった。当初は、広い原野があり、産物も多く、地形的に適していると考えられたルルモツベ(留萌)を本陣屋とし、ほか各領に脇陣屋を設けるという案が有力であった。しかし、領地の南端に位置し、警備を行う歌棄(厚田)にも近く、ルルモツベより温暖で冬を越すのが容易であるなどの理由から浜益に



▲国指定の史跡である「国史跡荘内藩ハママシケ陣屋跡」

幕末における荘内藩陣屋

現在の石狩市浜益区には六千年ほど前から人が住んでいた。オホーツク文化をもつモヨロ人の遺跡も発見されている。中世はアイヌの人達が生活しており、叙事詩ユーカラでは、浜益が舞台として物語が繰り広げられている。和人がこの地域に本格的に進出するのは江戸時代。村の状況が記録として残っているのは江戸時代も後期のことである。

とくに浜益が繁栄したのは、幕府から領地を与えられた荘内藩が警護を行っていた、幕末の時代である。現在の川下地区を開拓し、十数棟の邸舎が建築され、

本陣屋を置いたのである。

ハママシケ陣屋は現在の浜益川の北岸に敷地を設定し、荘内から運んだ資材を用いて1年で15棟の建物を完成させた。

浜益川から陣屋までの湿原に約435mにわたり堀(運河)を設け、小舟で資材を運んだ。この堀は、建設に二千両(現在の価値で五千万円以上)を費やしたことから「千両堀」と称した。当時の川の流れは、海に真っ直ぐ注がず、国道231号のあたりを海岸とほぼ平行して北に流れていたという。

陣屋での生活は、藩士は武芸の訓練、足軽は農耕と訓練、郷夫は農耕を行っていた。

衣・食・住に関しては、衣料と住まいは激しい雪と寒さで厳しいものであったが、食については豊かだっ

それを「御陣屋」と称していた。この跡は、昭和63年5月に国指定の史跡となり、歴史的・学術的価値の高い史跡として現存している。

なぜ浜益に本陣屋を置いたのか

荘内藩は、安政6年(1859)西蝦夷地のハママシケ(浜増毛・浜益)領、ルルモツベ(留萌)領、テシホ(天塩)領まで、テウレ(天売)・ヤンゲシリ(焼尻)島を与えられ、ヲタスツ(歌棄)領からアツタ(厚田)領までの警備を命じられた。荘内藩の蝦夷領地経営の拠点



▲多額の資金をかけ建設した『千両堀』の現在

たと云われている。食糧や生活用品は基本的には荘内から運ばれていたが、現地で購入したものも使っていた。夏には川釣りを楽しんだり、冬は訓練を兼ね狩猟をした。狩で得た野鳥を鳥汁にしたり、陣屋周辺で採集した山菜などを楽しみながら食していた。幕府の終焉とともに荘内藩はすべて引き揚げたが、陣屋での生活はわずか7年程の出来事だった。

※モヨロ人：6～12世紀頃、オホーツクに定住していた民族。オホーツク人とも呼ばれる。網走市にはモヨロ貝塚遺跡が残されている。

美しい浜益の自然

陸の孤島だった浜益

浜益はかつて、陸の孤島と呼ばれていた。西側は日本海に面し、北東から南東を山々に囲まれた山岳地帯だったためである。山道は険しくあてにはできない道であり、外界へ出るための手段は海路のみだった。陸路（国道231号）が全面的に開通したのは、昭和56年だった。（雄冬岬トンネルの崩壊があり、昭和59年復旧し全面開通となっている）。

濃昼山道

陸路が発達していなかった時代、

山道は廢道となる。

しかし、平成12年、この山道を蘇らせようと『濃昼山道保存会』が結成され、草刈りなど整備を行った結果、平成17年に山道は30年ぶりに歩くことができるようになった。

黄金山

標高739・1メートル、浜益の象徴的存在である。砂金を採りに入った和人が「黄金山」と名付けたと云われている。形が富士山に似ていることから、「黄金富士」「浜益富士」とも呼ばれる。頂上からは暑寒別連峰、晴れた日は遠く積丹半島まで一望することができる。

急峻ではあるが、初心者にも適した山頂まで約2時間の登山道であり、さまざまな植物や鳥たちが登山家を楽しませる。

また、アイヌの信仰や文化との結



▲濃昼山道入り口

蝦夷地を直轄していた江戸幕府に命じられ、濱屋与三右衛門によって濃昼山道が切り拓かれた。安政4年（1857）の出来事だった。安瀬から濃昼までの約11kmに及ぶその山道が陸上通行を可能にした。蝦夷地の警備を命



▲樹齢1500年黄金山のイチイ

び付きも強く、この山はアイヌにとつて聖なる守り神なのである。平成21年には文化庁からアイヌ文化に関連する名勝として指定を受けている。

登山道の入口に行く途中に、平成12年環境庁巨樹・巨木林調査イチイの部で全国第18位になった「黄金山のイチイ」があり名所となっている。高さ18mに太々としたその幹は、樹齢千五百年の歴史の重み

▼濃昼山道ウォーク



じられた荘内藩が防衛と開拓のために利用していた。

明治期以降は、地元の生活道路として使われたが、住民は崖沿いの狭い道を苦勞しながら歩いたという。時とともに、険しい山岳部を通るルートを避け、違う道筋に変えられていったが、昭和46年、国道231号が開通すると濃昼

とスピリチュアルな雰囲気を感じさせる。

増毛山道

増毛町の別荘から幌まで約27kmの山道。江戸幕府から命を受けた増毛の商人、伊達林右衛門が安政4年（1857）に私費で開削した。駅通も建てられ、郵便物をはじめとした物資の輸送や旅人の宿泊なども担っていた。昭和20年代まで活用されていたが、海沿いの国道開通で交通量が減り、やがて草木が生い茂り忘れ去られてしまった。

平成20年、有志でつくる『増毛山道の会』がササ狩りを開始。平成28年秋に全線復元。

道中の浜益御殿（標高1038m）頂上付近には明治に敷設された北海道で最も標高の高い位置の二等水準点が今もなお残っている。

浜益の産業

漁業 ニシン漁

浜益の漁業の始まりは、アイヌの鮭漁だったが、その後中心はニシン漁へと移っていく。

始まりは松前藩によりマシケ場所が設けられた宝永3年（1706）と云われる。当時は、たも網でニシンをすくい取るような原始的な漁法だった。

明治時代に入り、ニシン漁業は個人経営体制となった。その結果、経営者数・持網数が増加し、技術の向上もあり、明治38年（1905）ころまでに漁獲量がピークとなった。しかし、大正から

昭和にかけて漁獲量が大きく変動する不安定な時代を迎え、経営者は試行錯誤した。

そして昭和28年の大漁を最後に、2年後の昭和30年（1955）、突如、ニシンがほとんど獲れなくなり、ニシン漁は終焉を迎えたのである。

現在、全盛期に建てられた鱈番屋が昭和46年（1971）に改修され、「はまます郷土資料館」になっている。浜益小学校では、ニシン漁が盛んだったころに唄われた「沖揚げ音頭」をふるさと祭りで毎年披露している。「ニシンが来たぞー」のかけ声を合図に、かつてのニシン

漁の様子を子ども達が再現している。

また、浜益在住の創作人形作家・八田美津さんは、手づくり人形の展示会を通して浜益のさまざまな



▲浜益のニシン漁を再現した創作人形（作・八田美津さん）

な歴史や文化を市民に伝えていく。数多くの作品の中には、浜益のニシン漁を再現した場面もあり、ニシン漁が浜益の歴史の大きな出来事だったことを物語る。

果樹栽培

～百年りんご～



▲りんご、さくらんぼ、プラムなど多くの品種を育てる

浜益の中心部から国道231号を少し北上した海岸沿いの岬。日本海の暖流の影響で温暖な気候のため、明治時代から果樹栽培が盛んであり、石狩市で唯一の果

樹園のある地区である。

明治7年（1873）、北海道開拓使からりんごやさくらんぼ、あんずなどの苗木が無償で配られたが、とくに岬は熱心に取り組んだ地区であった。生育がよく品質もほかに劣らない果物を多く生産し、札幌はじめ全道に販路を拡げていった。

戦時中の人出不足で管理が行き届かず、収穫が激減した時期

もあつたが、戦後徐々に数を戻し、現在は安定した経営をおこなっている。

現在では、さくらんぼ狩り・りんご狩り等の体験観光も人気である。

米の栽培

幕末、荘内藩によって水田が造成され、米の収穫をしていたが、荘内藩が引き揚げたあとから明治初期まで耕作はされなかった。明治中期から稲作が再開され、技術の進歩とともに大正・昭和への発展へとつながった。当時、浜益のお米がおいしいのは、水がきれいという環境のほか、大量のニシン粕を土にまぜて育てたからと言う人もいた。

現在も柏木・川下地区の中央を流れる浜益川を中心に、水田地帯がひろがり、「ななつぼし」などが栽培されている。



▲「きむら果樹園では戦前樺太（現在のサハリン）の出張所で林檎を販売していた」当時のポスター

浜益の逸話



▲義経が訪れたという濃昼

義経伝説

北海道西海岸各地には、源義経にかかわる伝説が多くあるが、浜益にも濃昼（しほひる）と群別（ぐんべつ）に現れたという言い伝えがある。

歴史上は、衣川で討死している義経であるが、蝦夷地に渡り、西海岸を北上していた途中に、濃昼に漂着したという。そこにはトミハセという石狩川以北随一のアイヌの酋長がいた。義経一行来訪の知らせを受けたトミハセは、盛大にもてなした。

トミハセには娘がいた。ハツとするようなピリカメノコ（美しい少女）

びたように見えることからそう呼ばれている。「新日本名木100選」に選定された、推定樹齢820年、幹周り4・8メートル、樹高約18メートルの名木である。

幹に触れると病気が治るなど、不思議な力を持つ御利益のある

木として、メディアにも多く取り上げられた。全国的にもパワースポットとして有名になり、年間約三千人もの人が訪れている。

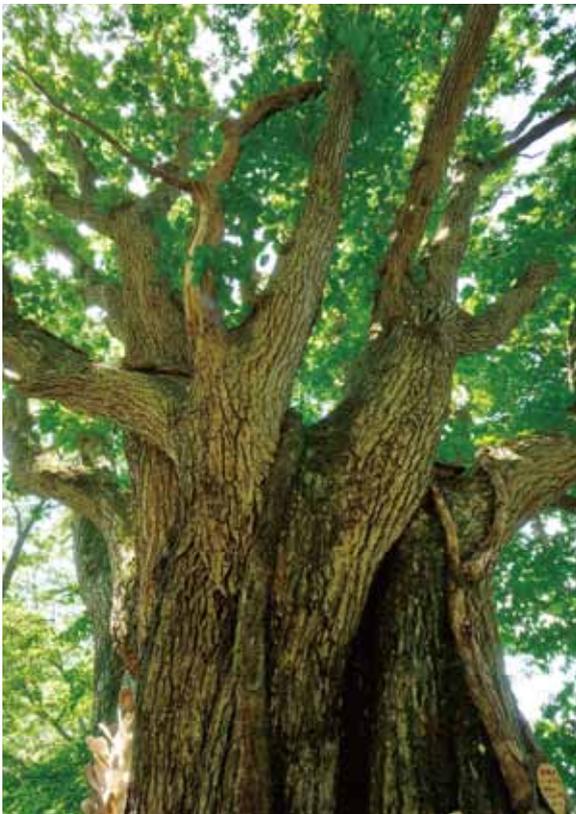
また、推定樹齢から浜益に辿り着いた義経が滞在中に、植えた木ではないかという伝説もあるのは大変興味深い。

だった。その娘が義経に恋をしてしまう。季節が変わり、疲れも癒えた義経が浜益を旅立つ日、老婆が、娘の身代りにと頭の朱色の2羽の岩燕を贈った。燕は、すぐに娘のもとに舞い戻ってきてしまったのだが、別れを悲しんだメノコは毒をあおって、すでに死んでしまっていた。岩燕はいまだに娘のことを思い、濃昼の洞窟に棲みついているという。

その後、義経は群別、増毛と北上し、その後モンゴルへと旅立ったことになっている。

千本ナラ

送毛（おくげ）山道の頂上付近に大木が立っている。これが千本ナラである。日本海から吹き上げる風の影響で、多くの枝が空に向かって伸びている姿が、千手観音の手が伸



▲パワースポットとしても人気の千本ナラ



アイヌ民族との関わり

浜益におけるアイヌ文化

浜益は道内でもアイヌ民族との関わりが大変深いことで知られる。道内の他の地区でもみられるように、アイヌ語が語源となった地名が多い(トクコタンⅡ床丹、ホンクンベツⅡ群別、アイカップⅡ愛冠など)。

特筆すべきは、ユーカラで語られている舞台が浜益であるということだろう。アイヌ民族は文字を持っていないため、物語にリズムを加えて語り、後世に言い伝えていた。この方法「ユーカラ伝承」が、浜益から始まったと金田二郎助博士によって紹介されている。

アイヌ達が守り神として敬ったのが、黄金山である。南西に位置する「摺鉢山」とは夫婦山すりばちのやまと言われ、二山一体で神聖な存在とされていた。この二帯は、ユーカラに登場する「ポイヤウンペ」が拠点としていた場所と伝えられる。ポイヤウンペは、大陸からオホーツク文化をもたらしたモヨロ民族との戦争時、敵を撃退した英雄である。ポイヤウンペが本拠地としていたのがトミサンベツ(現在の浜益川)と云われている。洞爺湖のオヤウカムイという羽根の生えた蛇神を征伐するため遠征した時には、全身に大火傷を負ってしまい、石狩へ逃れ、その後トミサンベツの黄金山の金の館に難を逃れたという伝説がある。

北海道を命名した松浦武四郎もこの地を訪れ、アイヌの人々の生活を見聞するとともに、増毛山道へと登っていったとのことである。

▲アイヌの文化と信仰に結びつきの強い黄金山、摺鉢山